



冬之日  
尾張又寄他  
全



雲  
葉  
庫

張  
錫  
梅

笠をかき逢のふくむらうの成衣の  
とゆわく農あつにまをすり  
徒はうたふと人あはれに  
おほんちうむのゝ犯奇れもま  
國アアアアアアアアアア

いさかき

芭蕉

犯白こからく女身を行ふは  
ききもとびの家をいのみ茶花野水  
有明のさゆく酒をうらうとく  
うらふれあををあるふあのみ  
朝鮮のほそあまはあはれ  
日さちあくは野うまをす  
正平

わのふちをうつにすむのふちをうつくすむく野水  
發るやよむを志のふちのうつくすむく  
つらりのつらりと乳を志のふちのうつくすむく  
さえぬをうつくすむく  
乳法のありすむく火を燻く  
あそびをうつくすむく虚家  
田中をうつくすむく  
さむくをうつくすむく  
引人ハらんこの

半そこのをうつくすむく月夜  
あそびをうつくすむく  
二の尾くをうつくすむく  
標をうつくすむく  
のりおめをうつくすむく  
あそびをうつくすむく  
あそびの記念のふちのうつくすむく  
あそび宗紙は名を付く水

三  
望ぬ家て毎程あそめぬも心何由荷る  
冬うれいさきくふり唐首燈水  
志らくと碎らうと人の骨う何社國  
鳥賊ハるんもの國此くこの事又  
あふれこれ謎もところ一都么野あ  
秋水一斗一もあつても夜そ芭蕉  
白赤の赤子白う坊く月を成りて  
中く不程なれも心琵琶抄荷る

うしの夜もあつぬも此夕も秋く芭蕉  
算く一簞の奥を成りましく一筆  
わのいのりあまもは星孕もく荷る  
そふささいまはまのこいさい  
綾のくを羽陽く志賀の花藤て社國  
序下と藤のうげさあやきと

あふみの壮年  
あふみのまを振る

整水

あふみのまを振る

あふみのまを振る 食 杜國

あふみのまを振る 芭蕉

あふみのまを振る 荷弓

あふみのまを振る 重五

あふみのまを振る 正平

るうあし深き事の回標おあて 杜園  
奥のこけりくもの森只なまてあく 禁水  
床もまろくはすいしをわする男 荷す  
縁さゆきけ此恨このまわく ぐき  
はかしく癒をこらさる地あうまよ 時水  
明日をうさるまにさび道あまを きて  
小三ちうく盆さうあひくさる地 芭蕉  
月無くまのれ牡丹 ぬす人 杜園

魂あふのがわあぶれ習落く きて  
あひくさるまの地花切町 荷す  
物もあまをせや娘のひのまわく 杜園  
あふあひくさるまの地 ぬす人  
櫛くこに餌をのうはあまのまわく きて  
うらまを起しんあ場とあま 芭蕉  
藤あひくすを傍れ帯さる 時水  
三線あひく不破のせま 人 きて

るすら英徳て打やう基と云ふ道業  
祢とせくのみとてと 七十 杜國  
奉りめ次は中より重くらあひん 志又  
ひの川の傘カサれ下シタあわとん 夢  
蓮レン池チと夢の子コ遊ユふ夕ユフも夢 杜國  
まごにまつら落ツク極キョクをもとん 夢水  
月ツキも夢とら唐カラ輪リンの燈トウは赤アカ徳トクて 為  
急イサとめいぬの臨リン濟ジも夢の 夢水

秋アキ幡フタもら虚カラく落ツクとてと 夢水  
夢の實ミつてふも夢 夢ちり 夢水  
後ノチより祝イハヒをひらとてと 夢水  
花ハナもわを典ス侍シの鳥トリの由ユ作サの 杜國  
こく此ココ花ハナ鸚イン鵒トク尾ビのれもいふ 夢水  
— 祝イハヒのそとてと 夢の福フク活カツ為ナ 為



つえちのひく事僅く

十歩

つれづれとて月とわがあす霧のま

杜國

こわりのゆきりし水のひかすく

重五

菫原の露をよ初結人かきく夏

野水

山の川門をたけしあやみかきく

芭蕉

馬糞搔あかきん風のたけすき

荷兮

茶此後者おしむ時へのあま英

正平

新しきけし物も娘のしんき  
燈籠もふりなまをくらふ杜國  
つゝ秋のすゆふかた標りしあき  
蕎麥とく青く濃噴糸の物  
物月夜双六りの膝おし  
おふ買ッザラにほもも  
志ゆふはのちとく雛と抱り  
海崎の美うわまあんことす

下八

すう死すては浪の吹くられ行  
佛喰もる臭解ハトこい  
縣あるとふしんひつと仰の  
又形ダ莖ダまら 島六 又  
真豆の馬り秘あこ  
おのふ也夫刻の鶴もあふ  
庄屋金はやく

捨しふるを柴刈長タチのつるし 野水  
晦日ミカととむひく刀賣る年一 年一  
雪の根呉孤國の笠をとりま 荷  
襟しき雄の片袖をとく とき  
あつくと朽ちぬ棺と吞せし 是又  
芥子のぬくく名とるは禪 杜玉  
三日月の東を暗く後の輝 芭蕉  
野瀬うけく琴之とと 者時あ

京品にたゆらしてととと 故の 杜玉  
群よる本念佛数あるはつる 荷  
のけすもは燈守りに起健く 野水  
あつくととむひく夜品の帯し 是又  
あつくと飛たすもあつたととと入 荷  
このちととととととととととととと

なま波はくあゝ火編あを  
よくやまきくせ

炭賣れものすまゝを馬の免

重五

いよほん糖花を鏡 磨 寒 荷

花蘇馬骨のまねく味を下 杜國

鶴りんごやまは月すすのち茶 野水

の取らぬ秋の瓶に酒をさす日 芭蕉

花蹴るのよゝあ市く振ゆる 羽笠

賀茂川や明彦千代宗の徽とて 道  
いそららの聳なるのうらみあふ 市  
にふつと布操舟とわたりたぐ 野  
うらまをささるちを越る三平 ニル 社  
於らけくわわらう鴛鴦離る 羽  
火とぬ火燧ふふ人と見え 世  
門守の翁にのみこころに 夢  
血刀うく次月の傍に 夢

芳下めて本郷の翁とて 三  
あゆむら納豆をくくながる 郷  
とらしく泣橋の徳とよそに 道  
僧とのいそ次歎冬を 春  
白燕帰るぬゆいあせ流る 鶴  
宣言がくこく釵と飾り 市  
十年と三つらむ童母のらて 野  
なうぶらそむる七夕のす 社

西の南に桂枝の木のついでとて  
 蘭のあふりりく ト本く音 芭蕉  
 勝るおれり 賢なる女にさへ  
 物瓶に雲をたけふ日のこれ 荷  
 さやわあしく 移るなる正月く 杜園  
 波が浜手向る 舟をさる文 舟水  
 寅月りたる 且と報治地急起く 芭蕉  
 さうやうりく 一 舟 糸 の 地 洋 羽道

いりきして 誰をさるぬ人の像 荷  
 涙くさく 涙のさるぬ 舟の根 舟水  
 粥すく 飯あつたま 舟がく 舟水  
 舟水のさる 舟 舟水 風 芭蕉  
 舟水のさる 舟 舟水 舟水  
 舟水のさる 舟 舟水 舟水

田家眺望

雲月や鶴カウのイツ々ツあツらツいツあツそツ 荷ツ

多ツ此ツ物ツ日ツ々ツあツらツいツあツそツ 芭蕉

櫻ツ檜ツ山ツ家ツのツ体ツとツ不ツ此ツ系ツ際ツ 重五

此ツ系ツどツるツしツ此ツ塩ツとツあツれツつツ 杜國

音ツ之ツのツ具ツ足ツくツ月ツのツふツすツくツ 羽笠

酌ツもツるツ童ツ志ツ系ツ切ツくツ 笠水

秋のころ猿如の連歌いものりく  
 淋ぐくしき重し富士のゆる寺 荷方  
 舞として椿れたのたのたの音 杜國  
 茶く系遊花くゆる風の考 市又  
 雉追に烏帽子れ女又三 十 野水  
 庭へ一本芳化くゆるの落衣 羽室  
 ふひめくよ山橋くゆるゆるし 荷方  
 麻うわとふ舟の集 ありし 市又

江をさく獨子菴と世に拾く 市又  
 家月出く身そかありゆる 杜國  
 きん衣帯くあ花と井拂 羽室  
 篋輿ゆる次木瓦の山あり 野水  
 骨をえく出く洞くゆるゆる 市又  
 乞食は義とくふ志の先 荷方  
 泥のくは尾を引鯉を拾んゆる 杜國  
 所幸く進むれみゆる 市又



こぼれてる幸此小角豆の花はり  
萱をまきしに炭團はく白羽笠  
芥子あまき此小坊交わし新むら  
おびくこすのみきとら連は賢  
志のまきく飯臺のまき月のあま  
あまきとくこつ子風やうのりよ  
物持し屋根のりきとら序庇  
豆腐つとりて母きとら妻く  
入

之改る幸此花を破ぬへ  
伏し本橋の落し外をこつ  
つら物こつ男猫はつら捨て  
芥子のあまき此雪とらとら  
水干とあまきの聖りやう  
山茶花白小笠此こつ

追記

けりしらんよと花雨しとるの舞  
 橋火しあつるの松の  
 こゝと下志に榮とちたてて  
 檜とくまを屋のし物と  
 舞しと蛤のし月色  
 海 芭蕉  
 のりし橋とせしは  
 山 笠水

貞享甲子歲

11

